
そして僕は掃除を始める

こんがりみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして僕は掃除を始める

【Nコード】

N2891L

【作者名】

こんがりみかん

【あらすじ】

「こいつらだけいいかい」

そういつて数えるだけの友達を「親友」と呼び、他の者を拒絶している少年。

そこに「掃除委員会」が現れる。

「君に掃除係になってほしい」

「君が掃除するのはクラスメイトだ」

この日から、少年は「掃除」を始めたのだった。

自己紹介（前書き）

はじめまして。

こんがりみかんと申します。

今回初めて小説を書かせていただいています。

思いついたことを書きなぐっている感じなので、

大変読みづらく、疲れると思います。

ですが本人はかなり本気なので、読んでいただけたらうれしいです。

また、感想等をいただけると励みになるのでお気軽にコメントしてください。

あらすじを書くのが大変でした。

どうなっていくのか私もよくわからないので。。。

自己紹介

僕には友達がいる。

現在高校1年。

多くもなく少なくともないであろう人数の友達。

ほとんどが小、中学校の友達。高校での友達もいるにはいるが、二桁もいかない。

そのすべてが世間一般でいう「友達」の定義に当てはまるかどうかすら怪しい。

つまり高等学校以前の知り合いの方が僕の中の「友達レベル」は高い。

「友達レベル」というのは、知らない間に作られた脳内制度だ。

優先順位に使われている。気が合う友達ほどレベルは高い。

僕は「先に約束した方を優先」なんていう善人ではないので、よほどのことがない限り低レベルが高レベルをひっくり返すなんてことはない。

低いやつはいつまでたっても低いのだ。

極稀に革命を起こすやつもいるが最近はそんな人種との出会いもない。

結局のところ本当に仲が良いと呼べる友達は3〜4人だろう。

別に不便に思わない。それでいい。多すぎても疲れるだけだ。

むかしは考え方が違ったが、「不運な出来事」によって一変した。

今思えば、あの時期が「歪み」を深く刻み込んだ時だったのだろう。

あの時

現在6月。>br<

俺は今高校一年生だ。>br<

今年の春に、自分の学力と大体同じくらいの学校に入学した。>br<

いたって普通の全日制公立校。>br<

楽しい学校生活を期待していなかったといえは嘘になる。>br<

正直に言えば浮かれていた。>br<

友達とかも普通にいっぱいできて、クラスにも馴染んで、そこそこの生活を送れると思ってた。>br<

別にいいだろう。期待したって。>br<

ただ、これだけは断言できる>br<

もし今の俺が当時の俺に出会ったとしたら、迷わずこう言うだろう。

>br<

>br<

「調子に乗るなよ、クソ野郎」

最高の生活

朝は来る。

俺がどんなに拒否したって朝は来る。たまには連休でもとったらいいのに。

俺は歓喜するよ。

なあ太陽さんよ、休んでもいいんだぜ？

そんなに皆勤賞がほしいのか？

・・・ああそうかい。よくわかったよ。行けばいいんだろ、学校ってやつに。

俺の通う学校は家からだと50分ほどかかる。

しかも電車は通勤・通学ラッシュ。

なんでこんなところを選んだんだろうね、俺は。

いつも通りに遅刻ギリギリの時間に登校し、自席につく。

周りのクラスメイトは俺のほうをみて笑っている。

何がそんなにおもしろいのか。頼むから俺を見ないでくれ。

運動部の連中はなんだよくわからない言葉を浴びせてくる。

何を言っているのかはよく聞こえない。聞こうとしていないからだ。

俺のことは放っておいてくれよ。おもしろいことなら他にもいろいろあるだろう？

授業が始まるとさすがにみんな大人しくなる。

だが、その分は休み時間に回ってくる。廊下に出ると他のクラスの生徒から何かしらの言葉や、手が出てくる。校内をうろうろしているても、一部の2、3年生から言葉が飛んでくる。

だから俺は教室にいる。昼休みはたまに図書館に行って読書を楽しんでいる。あそこなら人が少ないので気を抜けるからだ。

最もつらいのは体育の授業の時間だ。運動音痴の俺には当然スポーツなどできるはずもなく、特にチームプレイのときは約50分間、みんなの罵声を聞くハメになる。一種の拷問だ。

こんな繰り返しにうんざりした俺は、最近はどうも無心で過ごすようにしている。

こんなのが俺の最高に最低な生活だ。

あの頃

嫌がらせを受けたり、暴言らしき言葉が俺に飛んできたりもするが、別に「いじめ」られてるわけじゃないだろう。俺がそう思ってるんだからきつとそうだ。そうだろ。そうだな。そうなんだよ。

>br<

別に考え方の問題だと思うわけで、これは単なる「遊び」なんだ。俺だけが一方的につまらない遊びなんだよ。>br<

友達がいらないわけじゃない。ちゃんとクラスには話すやつもいるさ。3人ほどな。少ないって思うやつがいるかもしれないけど、俺にとってはそれだけで十分なんだよ。だって「遊び」の参加者ではないんだから。>br<

それに、この3人は話が合ったりおもしろかったりで結構気に入ってる。そんなわけで、中学のころになにかと一緒にいた連中と、友達のレベルは均衡してたりするわけだ。>br<

中学のころの友人関係は今よりちよつと良いくらいだった気がする。むしろあの頃が一番よかった。よく遊ぶ連中は5人くらい。気づけば周りにみんながいて、俺がいて、一緒に笑ってた。>br< 戻るものなら戻りたいよ。どれだけ戻りたいかというところ、思い出せば涙が出てくるくらいかな。>br<

崩壊

いつも通りのだるい朝。>br<

>br<

いつも通りのつまらない授業。>br<

>br<

いつも通りのくだらない遊び。>br<

>br<

いつも通りの退屈な帰り道。

>br<

いつも通りの変わらない風景。

>br<

そんないつもどおりが過ぎ去ろうとしていく中で、

僕の目の前に立ちふさがったその男だけはいつも通りではなかった。

僕のいつも通りにその男の存在は許されていないはずだった。

それでもその男は現れた。

その男が現れたことによって僕の「いつも通り」は崩壊し、
新しい世界が始まった。

希望にも絶望にも満たされている世界が

その時

始まったんだ

出会い

そいつは唐突に俺の前に現れた。

焦げ茶色っぽいジーパンに無地の白Tシャツ。

その上に大き目の黒いジャンパーを着ている。

それだけの男ならどこにでもいるだろうし、

俺も何回か見かけたこともあるだろう。

ただ、そいつは異常なものを放っていた。

「濃い絶望の匂い」を放っていた。

なんでそう感じたのかはわからない。

ただ、直接響いてくるような感じがした。

家に帰ろうと自転車のペダルに乗せた俺の右足が震えている。

原因はたぶん恐怖だ。

俺は自分の日常にそれなりの絶望を抱えていると思っていた。

しかし、そんな俺の絶望なんか吹き飛ばしてしまうかのような重く、圧倒的な絶望がそこにはあった。

俺の中で、もうそいつを人として捉えることができなかった。

こいつは人じゃない。「何か」だ。

そんなものが目の前にいるんだから、俺は動けなかった。

「・・・・・・」

何か言ってくれればこっちも少しは楽になるのだが、

何もいってくれない。

こちらが何もできない以上、

向こうが何かしらの動作をしないと進まない。

何かが起きるまで、この地獄は続く。

「おいおい、勧誘に来てダンマリじゃ意味ないだろ？」

どれくらい続いたのかわからない地獄に、思わぬ救いが現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2891/>

そして僕は掃除を始める

2011年10月7日01時40分発行